

2021年12月 1 日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 畑 琴音
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） がんサバイバーの行動様式と報酬知覚が心理適応に及ぼす影響
論文題目（英文） The Effect of Behavior Style and Reward Perception on Psychological Adjustment in Cancer Survivors

公開審査会

実施年月日・時間 2021年11月29日・10：40—12：10
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス100号館 116教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	鈴木 伸一	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	田山 淳	博士（障害科学）	東北大学	臨床心理学
副査	国立がん研究センター・室長／早稲田大学・客員准教授	藤森麻衣子	博士（人間科学）	早稲田大学	精神腫瘍学

論文審査委員会は、畑琴音氏による博士学位論文「がんサバイバーの行動様式と報酬知覚が心理適応に及ぼす影響」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 コメント：中間報告会以降、継続的に行ってきた指導を踏まえた妥当な修正が成されており、がん患者への支援に寄与する重要かつ意義深い研究である。

1.2 質問：研究4の介入研究では、行動様式の変化があまりみられず、報酬知覚のみが向上した結果として心理適応が改善することが示唆されたのはなぜか。

回答：今回の対象者は、生活状態が比較的安定しており、行動レパトリーも豊富な人が多かったことから、行動自体の変化の幅は少なかったものの、行動に対する喜びや価値に注目したアプローチが奏功し、心理適応の改善に至ったと考えられる。

- 1.3 質問：本研究の今後の発展可能性の観点から、介入プログラムの社会実装に向けた対象者像や普及の方向性はどのようなものか。
回答：今後の方向性としては、心理適応状態の悪い人だけでなく、がんサバイバーに広く普及できるプログラムを目指しているが、想定対象者に対応した介入プログラムの最適化については、今後さらに検討が必要である。
- 1.4 質問：研究4の介入研究では、対象者の就労の有無はどうなっているか。
回答：対象者で就労しているのは2名のみであった。
- 1.5 質問：研究4の介入前後でPOMSの得点のみに改善がみられているのはなぜか。
回答：POMSは気分状態を測定する尺度であるので、介入前後という短期的な期間では気分状態の変化にとどまっていたと考えられる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
- 2.1.1 本研究を通して開発された介入プログラムが、どのような対象者に対してどのような効果をもたらすのか、また、今後の課題として、介入プログラムをどのように改訂し、どのような研究を積み重ねていく必要があるかをきちんと考察すべき。
- 2.1.2 回避的な行動様式が改善することで報酬知覚が改善することの理論的つながりがわかりにくい。行動様式の変化が報酬への感受性に影響するプロセスをどこかできちんと述べるべき。それに関連して、研究4においては行動様式の変化量と報酬知覚の変化量との相関も算出してはどうか。
- 2.1.3 研究3-2における群分けによる分析は、効果量の大きさのみに依拠した分析であるので、考察はもう少し控えめにすべき。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
- 2.2.1 本研究で開発された介入プログラムの効用と限界について総合考察において丁寧に総括するとともに、臨床応用可能性や今後の課題として、社会実装に向けた介入プログラムの方向性と研究課題について言及した。
- 2.2.2 行動様式の変化が報酬への感受性に影響するプロセスについて、回避的な機能を持つ行動が増加することで自発的な行動が減少し、正の強化を受ける機会が減少する。また、不安や心配への囚われが増加することで生活の中にあるポジティブな体験への意識が低下し、報酬に対する感受性が低下するというプロセスを想定している点について、研究3の考察に加筆した。また、研究4において相関分析を追加した結果、有意な相関は認められなかった。これを踏まえて、介入プログラムにおける報酬知覚の位置づけを考察した。
- 2.2.3 研究3-2の考察において、指摘を踏まえた修正を行った。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文の研究目的は、精緻な文献展望から先

行研究における問題点および課題を抽出した上で明確に設定されている。また研究目的の内容についても、国が定めたがん対策推進基本計画の理念ならびにがんサバイバーのニーズに合致したものであり、社会的意義および妥当性も高いといえる。

- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文は、研究目的を達成するために、がんサバイバーの行動様式を評価するための尺度開発、がんサバイバーの行動様式と心理適応との関連性を検討するための横断的・縦断的観察研究、さらには、観察研究で得られた知見に基づく介入プログラムの開発とその効果検討のための臨床研究を計画し、いずれも精緻な手続きによって研究が行われた。また、各研究の方法論およびデータ解析は、心理学および関連領域の先行研究の手法を踏襲した妥当な方法である。さらに、研究対象者の属性分布は、本論文が想定する母集団における一般的な分布とおおむね一致しており、データの妥当性も高いといえることから、本論文の方法論は明確かつ妥当であると判断できる。

なお、本論文の各研究の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を取得し（研究1：2019-119、研究2：2019-054、研究3：2019-119、研究4：2020-200、2020-347）、参加者に対して十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施しており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文の成果は、先行研究の展望および横断的・縦断的観察研究によって得られた知見に基づいて介入プログラムを開発し、その臨床効果を検証するという妥当な研究計画を設定し、それらを定量的かつ実証的に検討した点において明確性も非常に高い。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的かつ新規性がある。

3.4.1 本論文は、がんサバイバーの心理適応について、活動抑制と対処努力という機能の異なる2つの行動様式に着目し、その行動様式の改善と報酬知覚の向上が心理適応に及ぼす影響を検討したものであり、がん領域でこれまであまり取り上げられてこなかった、行動の機能や強化随伴性といった行動分析学の理論を当該領域の研究に適用した。

3.4.2 本論文は、がん領域であまり取り上げられてこなかった、がんサバイバーの生きがいや人生の価値といったポジティブな要因に焦点を当てて検討を行い、その有用性を実証的に明らかにした。

- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：がん経験者は、がんの再発や病状悪化の不安を抱えながら日常生活を送ることから、がんサバイバーへの心理社会的支援の重要性が指摘されている。しかし、これまでの先行研究は、がんサバイバーの抑うつ・不安状態の現状やそれらに影響を及ぼす不適応的な要因に焦点が当てられており、生きがいや人生の価値にといった前向きな態度や取り組みを促進するための研究が少なかった。本論文は、これらの点に焦点を当て、がんサバイバーの日常生活における行動様式とそれに伴う報酬知覚（喜びの実感）が心理適応にどのように影響するかを横断的・縦断的観察研究から明らかにし、それらを踏まえた介入プログラムを開発し、その臨床効果を検討した点は学術的価値が非常に高い

といえる。

また、本論文で開発された介入プログラムは、社会実装可能性の観点から、がんサバイバーが自宅で取り組めるセルフヘルプ形式のプログラムとなっており、心理的支援へのアクセシビリティを向上した点は、高い社会的意義を有していると判断できる。

- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：我が国のがん対策は、医療の充実にとどまらず、がん患者の生活および人生の質の向上のための統合的支援を重視している。これらの統合的支援の背景となる学問領域は、本学術院が目指す学際的人間科学そのものである。本論文は、がんサバイバーの行動様式と心理適応との関連性について、対象者の病状、治療歴、年齢、生活状態、心理状態などの生物・心理・社会的側面から検討し、学際的人間科学の視点から考察し、がん患者への統合的支援の具体策について提言をまとめた。これらの成果は人間のウェルビーイングの向上に向けた学際的研究に資するものであり、本論文の人間科学に対する貢献は高いと判断できる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・ 畑琴音、小野はるか、小川祐子、竹下若那、国里愛彦、鈴木伸一：2019 がん患者用活動抑制尺度（SIP-C）の作成と信頼性・妥当性の検討。総合病院精神医学、31巻、422-429頁。
- ・ Hata K、 Ono H、 Ogawa Y、 & Suzuki S: 2020 The mediating effect of activity restriction on the relationship between perceived physical symptoms and depression in cancer survivors. *Psycho-oncology*. 29巻4号、P663-670.
- ・ 畑琴音、小野はるか、鈴木伸一：2021 がん患者用活動抑制尺度改訂版（SIP-C-R）の作成と信頼性・妥当性の検討 総合病院精神医学、33巻2号、170-177頁
- ・ 畑琴音、小野はるか、鈴木伸一（印刷中）：がんの再発や病状悪化に関する不安・心配の対処努力の構成概念の検討と心理適応との関連 総合病院精神医学

- 5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上